

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 21 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320150

研究課題名(和文) 第一次世界戦争と東部欧州周縁地域：新たな「ヨーロッパ危険地帯」の歴史的起源研究

研究課題名(英文) The WWI and Eastern European Peripheries: The Historical Origin of New Danger Zone

研究代表者

佐原 哲也 (Sahara, Tetsuya)

明治大学・政治経済学部・教授

研究者番号：70254125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円、(間接経費) 4,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で得られた主な知見は、以下の通りである。東部欧州辺境地域における第一次世界大戦は、歴史認識の点からも実態からも、1912年のバルカン戦争の延長であった。総力戦体制の構築と社会経済システムの変質は、1912年に始まったが、西欧諸国と比較してその完成は遅れ、総動員態勢の整備は不完全なままに終わった。その歪みが戦後の議会制民主主義への速やかな移行を阻害し、民政への軍の介入が一般化し、1920年代には何れの国々も権威主義体制へと移行することになった。研究の結果、戦争中に活動を活発化させた国際テロ組織が戦後の政治体制の権威主義化に大きな影響を与えたことが判明し、新たな研究課題に浮上した。

研究成果の概要(英文)：The major findings of this research project are as follows. Both in terms of historical memories and practical changes, the First World War for the Eastern European peripheries was the continuation of the Balkan Wars that broke out in 1912. Thus, the preparation of war mobilization and related reforms in the socio-economic structures started earlier than the Western countries. The process was, however, retarded and could not achieve the expected result, no the less. It was this inconsistency that hindered the rapid recovery of war damage and normal return to the prewar parliament government. It precipitated the repeated military intervention into the civil authorities, and led to the establishment of authoritarian rules in the 1920. Our research shows that the international terrorist organizations that were much en-powered during the war were playing much more important roles than had been expected by the scholars, and it remains as one of the key questions to be solved.

研究分野：歴史学

科研費の分科・細目：東欧史

キーワード：第一次世界大戦 総力戦 動員体制 国際テロリズム

## 1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦は、その歴史的意義に鑑み、日本においても研究蓄積がなされてきたが、研究者の関心は戦闘主体となった欧州大国に向けられ、その検討対象も列強の予防外交の失敗や総力戦体制とその社会・経済的特質、あるいはロシア革命や国際連盟に代表される国際秩序の変化に向けられてきた。その一方で、列強に劣らず戦争の直接的影響を受けた東部欧州周縁地域（南東欧、コーカサス）に関しては、現在の国境線にほぼ一致する民族国家の成立をもって問題が解決したとみなされ、その背後に隠された構造的変化に関心が向けられなかった。だが、1990年以降に東部欧州周縁地域で表面化した地域紛争や民族問題を契機に、従来の研究の欠陥が指摘されるようになった。つまり、現代の諸問題は、第一次世界大戦の戦後処理への不満、戦中・戦後の暴力の記憶に由来する歴史の「不正義」への反発を背景にしているという問題提起である。

事実、現在の問題は大战の戦後処理に起因する社会発展の停滞と連関している。欧州周縁地域の歴史的後進性は、基本的人権や経済合理性とは無関係な民族主権国家の論理によって国境が策定され、大战が生み出した大量の難民の強制定住のように、既存の社会・経済関係を根底から破壊したことに起因することが研究者によって指摘されている。第一次世界大戦が欧州周縁地域に及ぼした影響を解明する作業は、現代の問題を解決する糸口でもあるのだ。

## 2. 研究の目的

本研究は、第一次世界大戦によって南東欧・コーカサスで生じた歴史的变化を総合的に捉えなおすことを目的とした。現地語資料に精通した日本人研究者と現地の研究協力者の参加により、各国の研究蓄積を批判的に再検討することが可能となり、従来の一国史的視点を乗り越えた新たな知見が得られることが予想された。具体的に検討する対象は、各国の戦時動員体制の比較とそれが社会に与えた影響、戦中・戦後の民間人に対する暴力と住民の移動（政策的な強制移住を含む）戦争に起因する政治構造の変化である。これは、新たな「ヨーロッパの危険地帯」の観を呈するこの地域の構造的対立の根源でもあり、本研究を通じて獲得される知見は、歴史研究のみならず、現代的な地域紛争・民族問題の克服・解決に資することが期待できると考えた。

### (1) 具体的な解明課題と達成目標

本研究が四年間の申請期間中に解明を目指したのは、次の3つの課題である。

軍事行動中に生じた民間人への迫害・攻撃の実態解明

戦争と戦後処理の過程で生じた住民移動

## 戦争に対する各国の歴史認識

それぞれの課題に関して研究期間中に達成を目指す目標は以下の通りであった。

については、国際調査団の報告書、各国政府がまとめた戦争被害に関する報告書、従軍記者のレポート、生存者の回想録等を収集し、その分析結果をもとに被害の全体像を解明する。特に論争の焦点となってきた、迫害が正規軍による組織的なものであったのか、それとも戦争による混乱を利用した義勇兵・民兵等による偶発的なものであったのかについて包括的な結論を出す。

については、戦争前後の各国の統計資料の比較分析による人口動態的变化の概要をまとめること、および戦争難民と移民の支援・定住化に関して各国が行った政策を分析し、その特徴と問題点を解明する。

については、各国の歴史教育における第一次世界戦争前後の時期に関する記述内容の比較およびこのテーマに関する歴史研究の動向と史学史的展開の特徴の抽出を行う、である。

### (2) 研究の特色と独創性、および意義について

本研究の特色は、10以上の言語によって書かれた資料と文献の包括的分析により、東部欧州周縁諸国の第一次世界大戦に関する研究蓄積を総合することにある。これまでの研究は自国語資料を基に民族史的なパラダイムに依拠した国民史として展開され、比較の視点が欠如していたが、本研究は、現地での研究実績と現地語資料に通暁した日本人研究者に加えて、セルビア、ブルガリア、ギリシャ、マケドニア、トルコ、グルジアから計14人の海外研究協力者が参加することで、国民史に収斂した従来の方法論を超えて、地域全体に生じた構造的変化を解明することが可能となった。また、従来は別々の地域として論じられていたバルカンとコーカサスを東部欧州周縁地域として共通の枠組みに位置づけ、比較する手法も独創的なものであった。

もう一つの特色は、研究代表者が築いてきた国際的な研究者のネットワークを利用することで、マルチラテラルな共通のアリーナ（発表と議論の場）を構築したことである。本研究は、優れた研究実績と伝統を誇る3つの海外研究機関（ユタ大学中東研究センター（アメリカ）、レーゲンスブルク大学（ドイツ）、ロシア科学アカデミー付属スラブ研究所）の隣接プロジェクトと協力関係にあり、真に国際的な研究協力関係が獲得されている。これにより、北米中心化が過度に進行しつつある地域史研究の欠陥を克服し、全く新しいアカデミズムのあり方を提示することにも貢献できることになる。

この研究を通じて獲得された学術的な知見は、この分野での日本の研究水準の飛躍的

上昇をもたらすのみならず、従来、各国ごとに乖離・矛盾してきた第一次世界大戦に関する認識を修正し、今後は、この地域の近代史の通説に大きな影響を与えるであろう。とりわけ、アルメニア問題、グルジア危機、バルカン諸国での民族排外主義の台頭といった、現代的政治問題の平和的解決に有効な知見を提供することになる。

### 3. 研究の方法

本研究では、東部欧州周縁地域の研究者と、日本側の分担者の共同作業によって史料・文献の体系的収集・分析を行い、それらの成果を米・独・露の研究者と共同で比較・整理するという二つの作業を並行して進めた。初年度は、研究課題に沿って研究史の整理と関連する資料の収集に重点を置き、日本側の研究者を各国に派遣し、文献・史料の調査を行うとともに、現地の研究協力者から専門的知識の提供を受けた。23年度以降は、初年度の作業の補完を進めるとともに、複数のワークショップを現地で開催し、各国の研究者の議論の集約と共有を進めた。最終年度には、最終的な見解をまとめる意味で国際会議を開催した。

#### (1)22年度の研究方法

初年度は、研究史の整理と関連する資料の保存状態の確認を中心に作業を進めた。

基本的作業：現地の研究協力者を通じて各国の図書館・文書館に保存されている資料の収集、日本側研究者は協力者との連絡・調整・進展状況を確認した。

海外調査：研究史の分析に必要となる資料調査のため、研究代表者、分担者、協力者の1名を担当の国に派遣し、文献の収集と史料の保存状態の確認、現地協力者との打ち合わせを行った。

国内ワークショップ：日本側研究者は、7月上旬に明治大学でワークショップを開催し、各国の史学史の概要を比較し、その問題点と共通する検討課題の抽出を行った。1月にはセルビアの研究協力者を交えて2度目のワークショップを開催した。

国際ネットワークの構築：上記作業と並行して、米・独・露の三研究機関との共同作業を進めた。

#### (2) 23年度

基本的作業の継続

海外調査：研究代表者・分担者がトルコ・グルジア、ブルガリアで資料調査を行った。

現地ワークショップの開催

現代史研究所（セルビア）の協力をえて、バルカン戦争100周年を前に、同戦争がセルビア、マケドニア、コソボの社会構成にどのような変化をもたらしたのか、報告と議論が行われた。本研究の中間総括として、極めて重要な機会となった。

#### (3) 24年度

基本的作業の継続

海外調査：研究代表者、分担者が、トルコ、グルジア、ブルガリア、ボスニアで資料調査を行った。

現地ワークショップの開催

サラエボ大学（ボスニア）で、オスマン帝国と第一次世界大戦に関するワークショップを開催した。特に、オスマン帝国当局と、民族主義的組織との関係に関して、報告と討議を行った。

#### (4)平成 25年度

基本的作業の継続

海外調査：研究代表者、分担者がトルコ、グルジア、ブルガリアで資料調査を行った。

現地ワークショップの開催

6月のトビリシ大学（グルジア）、ユタ大学（アメリカ）の共催による国際会議（トビリシ大学）において、本研究はパネルを組織し、報告を行った。また、現地トビリシの研究者と学术交流を行い、双方の知見の共有を図ることができた。次いで、中東工科大学（アンカラ、トルコ）で本研究の海外共同研究者を招聘した会議を開催し、研究課題の分析結果を確認した。

9月にはソフィア大学との共催で第一次世界大戦が東部欧州辺境地域に与えた影響を包括的に分析するシンポジウムを開催した。

10月にはニューオーリンズ（アメリカ）で開催された国際中東学会において、本研究の研究課題をもとにセッションを組織し、報告を行った。中東研究との比較は、東部欧州周縁地域を考察するうえで重要な転機となった。

### 4. 研究成果

本研究の成果は、計画段階で想定していた研究課題に基づき、大きく次の三点に集約される。

まず、第一次世界大戦中の民間人への迫害・残虐行為が、とりわけ民族的少数者に集中している点が明示された。これらの迫害・残虐行為は、第一次世界大戦の戦争目的とされた民族解放や民族独立のイデオロギーによって動機づけられ、また正当化されており、大衆動員や経済統制に利用されていたという事実が解明された。また、戦術的側面では、既存の「革命的武装集団」が補助兵力として、後方攪乱や占領地の統制、少数民族の監視や追放に際して、主たる道具として使用されていたことが明白となった。

戦争被害の確定という課題は、十分に解明できなかった。客観的に信頼できる資料が僅かであり、殆どの統計が概算に過ぎなかったからである。しかし、その原因が次に挙げる歴史認識と結びついていることは証明できた。

歴史認識の衝突に関しては、現在にまで連なる歴史的神話の原型が、軍事的行為を正当化するためのロジックとして、この時期に形

成されたプロセスが明らかになった。

また、本研究を通じて、これまで研究代表者が構築してきた国際的研究ネットワークが、範囲の面でも研究の対象の面でも深化・拡大した点も、副次的ではあるが重要な成果である。このネットワークは、今後のこの分野における研究の国際的・国内的発展にとって、さらなる推進力となることが期待される。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

佐原哲也: “The 1909 Adana Incidents (Part 4): Riots and Massacres in the Countryside” 『明治大学教養論集』 490、109-150 (2013), 査読有

百瀬亮司: 「1980年代セルビアにおける歴史認識とコソヴォ - イリュリア人起源論をめぐって - 」 『歴史研究』 50. 51-96 (2013), 査読有

佐原哲也: “The 1909 Adana Incident (Part Three) : Rioting in Adana” 『いずみあ』 4. 99-127 (2012), 査読有

佐原哲也: “The 1909 Adana Incident (Part 2): The Young Turk Revolution and the Muslim-Armenian Confrontation in Adana” 『明治大学教養論集』 467.41-97 (2011), 査読有

前田弘毅: 「グルジア紛争への道-バラ革命以降のグルジア政治の特徴について」 『ロシア・ユーラシアの経済と社会』 947. 2-13 (2011), 査読有

百瀬亮司: 「旧ユーゴ研究をめぐる地域概念に関する一考察」 『旧ユーゴ研究の最前線』 3-17 (2011), 査読無

佐原哲也: “The 1909 Adana Incident(Part 1) : The Adana Province during the Nineteenth Century” 『明治大学教養論集』 456. 99-127 (2010), 査読有

村田奈々子: 「正教キリスト教世界と民族国家のはざままで-オスマン帝国領マケドニアのヴラヒ人の言語と帰属意識」 『歴史学研究』 873. 37-48 (2010), 査読有

村田奈々子: “Greek Communities Relocated in the Making of the Balkan Nations : The Greek Parliament's Tackling of Refugee Settlement and Land Distribution in Thessaly(1906-1907)” *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 26-2. 151-184 (2010), 査読有

[学会発表](計20件)

佐原哲也: “Vernacular Education: A Cradle of Nationalism or Something Else?” Middle East Studies Association 47<sup>th</sup> Annual Meeting (20131011). New Orleans (USA)

佐原哲也: “Origins of WWI in the Balkan Histoigraphy” The First World War and Its Impact on the Balkans and Eurasia. (20130918). St. Kliment Ohridski University of Sofia (Bulgaria)

佐原哲也: “Incorporation into the Capitalist World System and Ethnic Violence: A Comparison between the Ottoman Empire and Tsarist Russia” The Caucasus at Imperial Twilight: Nationalism, Ethnicity and Nation Building 1870s – 1920s. (20130606). Tbilisi National University (Georgia)

百瀬亮司: “The Kosovo Discourses in Serbian Historiography around the Balkan Wars” The Centenary of the Balkan Wars (1912-1913): Contested Stances. (20130524). Middle East Technical University (Turkey)

佐原哲也: “The Balkan Wars and the Root of the Contemporary Nationalism: The Ethnoreligious Geography” The Centenary of the Balkan Wars (1912-1913): Contested Stances. (20130524). Middle East Technical University (Turkey)

村田奈々子: “Discourses on Hellenism during the Balkan Wars: Aspects of Greek Nationalism” The Centenary of the Balkan Wars (1912-1913): Contested Stances. (20130524). Middle East Technical University (Turkey)

佐原哲也: “Alexander Protogerov and his anti-Serbian activities after the Balkan Wars” Historical Materialism and International Relations (20121103), Historical Sociology.

前田弘毅: commentator to the panel “Regime Change or Regime Dynamics? A Comparative Study of Backlashes” From Empire to Regional Power, between State and Non-state. (20120706). Slavic Research Center, Hokkaido University, Sapporo.

佐原哲也: “The Adana Incident 1909 and the Muslim Refugee Question”. 20<sup>th</sup> CIEPO

Symposium (20120629) University of Crete.

佐原哲也: “Secret Collaboration between the IMRO and the Ottoman Special Force on the Eve of the First World War”. The Ottoman Empire and World War I (20120519) Sarajevo University.

佐原哲也: “Persecution, Resistance and Cooperation: Turkish-Bulgarian Relations in the Southern Balkans during the Balkan War”. The Century of Balkan Wars (20120511) Kirklareli University.

佐原哲也: “ВМРО и турске тајне организације прогив четничких акција у Македонији” Први светски рат и балкански чвор. (20111206). Institute for Contemporary History (Serbia)

佐原哲也: “Paramilitary in the Balkan Wars : The case of Macedonian Adrianople Legion” The Balkan Wars : 100 Years After. (20110908). Institute for Contemporary History (Serbia)

佐原哲也: “Between Heroes and Criminals” Lasting Socio-Political Impacts Of The Balkan Wars. (20110504). The Utah University (USA)

前田弘毅: “The Caucasian Slave Elites in the Iranian Empires, 1600-1900” Muslim Identities and Imperial Spaces: Networks, Mobility, and the Geopolitics of Empire and Nation (1700-2011), (20110407-20110408). Stanford University.

宇野陽子: “Demarcating the borders of 'Turkey': The Lausanne Treaty (1923) and the building of the Turkish nation-state” NIHU Program Islamic Area Studies Third International Conference 2010. (20101217-20101219). 東洋文庫

吉村貴之: 「現代アルメニア政治に見る「本国」と在外同胞」 ロシア・東欧学会、JSSEES2010 年合同研究大会. (20101024). 天理大学

吉村貴之: 「第二次大戦後のアルメニア人帰還運動」 国際中東欧学会(ICCEES)第 8 回世界大会. (20100730). ストックホルム

佐原哲也: 「1909 年のアダナ事件とジェベリ・ベレケト県」 日本中東学会第 26 回大会. (20100509). 中央大学

佐原哲也: “Victim oriented journalism and

the Batak incident” The Political and Social Implications for the Ottoman Empire and its Successor States of the Treaty of Berlin 1878. (20100402). Utah University

〔図書〕(計 9 件)

佐原哲也: “What happened in Adana in April 1909? Conflicting Armenian and Turkish views” Isis Press. 180 (2013)

佐原哲也: “War and Nationalism: The Balkan Wars, 1912-1913, and Their Sociopolitical Implications” Chapter 14 “Paramilitaries in the Balkan wars : the case of Macedonian Adrianople volunteers” the University of Utah Press. 399-419 (2013)

佐原哲也: “The Balkan Wars 1912 -1913: New Views and Interpretations” “The Bulgaro-Ottoman Anti-Serbian Activities after the Balkan Wars, with Documents Recently Found at the Turkish Military Archive” The Institute of History, Strategic Research Institute. 393-405 (2013)

前田弘毅: 『ユーラシア世界 1<東>と<西>』 「ツアーリとシャーに仕えたアルメニア人: 「言葉の箱」と呼ばれた一族の活動から」 東京大学出版会、127-152 (2012)

石田勇治、吉村貴之他: 『ジェノサイドと現代世界』 勉誠出版. 165-194 (2011)

佐原哲也: “War and Diplomacy : The Russo-Turkish War of 1877-1878 and the Treaty of Berlin” Chapter 17 “Two Different Images : Bulgarian and English Sources on the Batak Incident” the University of Utah Press. 479-510 (2011)

松本弘、吉村貴之他: 『中東・イスラーム諸国民文化ハンドブック』 人間文化研究機構 地域研究推進事業「イスラーム地域研究」東京大学拠点.484-499 (2010)

佐原哲也: “City in the Ottoman Empire, The Migration and the Making of Urban Modernity” Routledge. 26-50 (2010)

宮治美江子、吉村貴之他: 『中東・北アフリカのディアスポラ』(叢書グローバル・ディアスポラ 3) 明石書店. 75-100 (2010)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称 :  
発明者 :

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者 佐原哲也  
明治大学・政治経済学部・教授

研究者番号：70254125

(2)研究分担者 前田弘毅  
首都大学東京・都市教養学部・准教授

研究者番号：90374071

(3)研究分担者 百瀬亮司  
大阪大学・世界言語研究センター・助教  
(平成22～23年度)

研究者番号：00506389

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：